

二年間を振り返って

小島 由希

「少しは慣れたでしょ」「表情に余裕が出てきたね」

そう言われて、「少しは先生の顔になってきたかな」と思いながら鏡を見る。

保育者になって二年目、四月からは三年目になる。とはいっても、四歳から五歳へは持ち上がりだったため、三年目からが気持ちの中の二年目ということになりそうだ。

この二年、無我夢中という言葉がまさにぴったりの生活だったように思う。走り回る子どもを前にオロオロと立ちつくした入園式。時間に追われるように降園させ、保育室に座りこんでしまいそうになる日々が続いた一学期。「子どもたちが話を聞いてくれない」と自分に自信をなくし、保育中に泣いてしまったこと。手を真っ黒にしなから土手登りに挑戦し、「先生、子どももみただね

え」と言われたこと。そして、子どもとの生活も二年目を迎え、「こんなことも出来るんだ」「ずいぶん顔つきがしっかりしてきたな」と、成長ぶりに驚いたり喜んだりすることが多くなってきた年長組……。

遊びの様子や子どもの育ちなどを書き込んだ記録の端には、そんな戸惑いや不安、迷いなどが走り書きでメモしてあり、この二年間で経験したいろいろな思いを読み取ることができる。

「今日もまたグチャグチャになってしまった。どうしてだろう」「幼稚園の先生にむいていないのかな」「自分の指導力の無さに情けなくて涙が出てしまった」「今日は少し落ち着いて子どもとかわかることが出来た。楽しかった」。反省や後悔ばかりが目立つ内容だが、その日その日の出来事、子どもの様子に喜んだりがっかりしたり悩んだりしたことを素直な気持ちで思いつくまに書

いている。保育で自信をなくしたとき、迷ったとき、ふと思いついてこのメモ書きを読むと、「こんなときもあったな」「今だったらこうするかな」と、その時の自分の奮闘ぶりが思い出されて（本質的な問題は解決しないのだけれども）元気が湧いてきたり、初めの頃の新鮮な気持ちを改めて思い出すことができるような気がするのである。

このメモを読み返してみると、今まで経験してきた出来事の一つ一つ、例えば、遠足や運動会などの行事や毎日の遊び、子どものつぶやきや仕事などの日常のあらゆることが、知らないうちに自分の中に経験としてため込まれ、それが少しずつ気持ちに余裕を生み出していることに気づく。そして、その気持ちの余裕に比例して、「ああ、そうだったのか」「○○ちゃんには、こんな一面もあったんだ」という新しい発見やいろいろな見方をする機会が増えてきたことも確かなこととして

感じられる。これも、余裕をもってかかわることができるようになってきた分、子どものことをより深くみつめ、考えられるようになってきたからなのだと思う。

気持ちに余裕をもてるようになり、その人もっている力が発揮されるようになること、これが「慣れる」ということではないだろうか。

しかし、保育の中では、「慣れ」の気持ちがあまりにあまり好ましくないところで表われてしまうこともないとはいえない。以前にも経験したことのある場面、子どもの遊び、様子に、つい「またいつもの」だろう、「こうなるだろう」という勝手な思い込みや見通しで言葉かけや対応をしてしまい、何となく不満そうな、納得しないような子どもの言葉や態度にハッとさせられることがある。そんな時、わけも分からずただ一生懸命に思っていることを聞く以外に方法がないと思っていた頃

の方が子どもの言葉に耳を傾けていたかもしれない、一人一人の子どもの気持ちを大事にすることに一生懸命だったかもしれないと、恥ずかしさでいっぱいになる。

時に「不慣れ」であることも、保育者にとっては必要なことなのかもしれない。

*

保育者になって過ごしたこの二年間のことを考えると、改めて、保育という仕事に就くことができたことを幸せに思う。子どもの言葉や行動に笑ったり喜んだりがっかりしたり、時には思いもよらない出来事に眠れなくなったりと、まさに全力投球の毎日という感じであるが、一日として同じように展開される日がないこの生活が、今案じて仕方がない。あと十数年もすればベテランと呼ばれるようになるのだろうか、いつまでもな

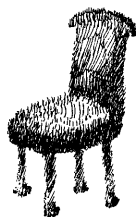
りたての頃のように新鮮な気持ちで子どもに向かい合える保育者でいたいと思う。そして時々は記録などを読み返しながら、何もかも分からず真っ白な、でも一生懸命な気持ちをいつまでも忘れな

いようにこれからもやっていきたいと思う。

(茨城大学教育学部附属幼稚園)

在外子女の異文化対応の諸相

——異文化間を往還する者のストラテジー——



渋谷 真樹

グローバル化する現在、多くの人が国境を越えて行き来している。父親の転勤に伴って海外で

生活する日本人子女が増えているのも、その一環である。在外子女と呼ばれる彼・彼女達は、ある